ヘヴィメタルの再興に言寄せて

外国語学部　英語英文学科3年　今村　豊

2006年10月15日幕張メッセにて

何故か黒いシャツが目に付く人の群。この写真は一体、何処で撮影され、何を写したものなのでしょうか？

2006年10月14日、15日の2日間において、幕張メッセでLOUD PARK 06という、日本で初のヘヴィメタルフェスティバルが行われました。この写真は、10月15日の幕張メッセでの通路の様子です。日本人だけに留まらず、多くの外国人の方々も一様に黒いTシャツを着ているという、とても奇異かつ壮観な図です。

といっても聴衆の方々がそれほど気合いを入れてしまうのも頷けるというものです。何故なら、このLOUD PARK 06は海外の名だたるヘヴィメタルバンドが集結して、一日中ライブを繰り広げるからです。そのメンツたるや、新旧問わず話題性も実力も抜群のバンドばかり。スラッシュメタル（※1）の大御所であるMegadeth（※2）やSlayer（※3）を皮切りとして、北欧やアメリカ、日本からも勿論、世界のメタルバンドがこの日の為に日本にやって来ました。これだけ豪華なお膳立てを見せつけられて、少しも興奮しないメタル人間などいないでしょう。かく言う自分も、チケットを買ってからライブ当日までの期間を胸躍らせて過ごしたのでした。

実際に会場へと足を踏み入れると、聴衆の年齢層の幅広さに予想外の驚きを覚えました。最も多く目につくのは20代から30代前半くらいまでの人々ですが、よく見ると50歳は確実に越えているであろう男性や、まるで思い立ってキッチンを抜け出して来たような主婦風の中年女性まで、このLOUD PARK 06を観に来ている人々はほぼ老若男女関係無いようでした。挙げ句の果てには、小学生くらいの男の子まで家族と観に来ており、もはや年齢などという基準すら意味が無いような気がしてきます。その上、先述のように外国の方々までニコニコしながら日本人と肩を組んで歩いていたりして、ありふれた言い方ですが、本当に音楽が国境を越えられるのだと実感しました。さすが日本初のヘヴィメタルフェスティバル。伊達に大御所を招いていません。

このライブイベント、LOUD PARK 06というのは上記にもあるように、2日間続けて同じ会場で行われます。1日目、2日目ともに出演バンドのタイムテーブルはどこを取っても見逃せないバンドばかり。このタイムテーブルを企画した人々の努力と巧みさがうかがえます。クライマックスである最後の出演者の演奏時間が近づくにつれて、徐々に人気の高いバンドが出てくるので、否応なしに聴衆の気持ちは高ぶるばかりでした。会場内の人の群はみるみる膨れ上がって、ステージに最も近い列に並んでいる人は恐らく、立っているだけでも相当に苦しかっただろうと思います。

しかもこの二日続けてのイベント、というスケジュールのおかげで、体力的に限界な人々が沢山いたのを目撃しました。1日目のタイムテーブルを満喫しようと、午前中から午後十時くらいまで足を棒にして楽しんで、そのままへとへとになってどこかのホテルに泊まります。そして日が昇るや否や、また幕張メッセへ赴き、二日目のタイムテーブルを満喫しようとなけなしの体力を振り絞って、魂だけで音楽に飛びついていくという人々が会場には数え切れないほどいるようでした。何故そんな事情が垣間見えたのかというと、会場の隅や通路に設けられたベンチなど、至る所で死んだように仮眠をとっている人々がいたからです。僅かな時間でも眠りを貪って、やがて来るバンドの出演に備えるという様な、涙ぐましいまでの努力によってこのイベントの盛り上がりが支えられているという事実を、意外な所で発見したのです。勿論、そうした聴衆の努力と心意気もあって、LOUD PARK 06は大盛況のうちに幕を閉じました。

さて、ヘヴィメタルと言って、すぐに思いつくのは何でしょうか。一概に言えないのは承知です。それぞれに思うところがあって、時には似通ったり、時には全く違っていたりするのは当然でしょう。しかし、一般大衆の意見を総合すると「激しい、うるさい、暑苦しい、形式的、どれも同じ、黒い、暗い」という様に、どうも気軽に楽しむことを躊躇（ためら）ってしまうようなイメージが先行すると思います。こうした評価の幾つかは的を射ていますし、逆に人によっては、「そんなことはない」と言いたくなるかもしれません。しかし、一般的にヘヴィメタルを表現しようとする場合、このような評価を挙げれば、ヘヴィメタルのイメージが伝わってしまうのも事実です。

ここ最近では、テレビ番組でもヘヴィメタルを前面に押し出した内容のものがあったり、漫画でもヘヴィメタルを題材にしたものがあったりと、比較的ヘヴィメタルが目につくようになりました。そうした傾向の中で、偶然と言うべきか、今回のヘヴィメタルフェスティバルが開催されました。人気が低迷していると言われてきたヘヴィメタルの業界にも、一条の光が差し込んで来たかのように思えます。

しかし、テレビ番組や漫画を目にして頂ければ一目瞭然だとは思いますが、ヘヴィメタルに対する先行したイメージは相変わらず張り付いたようにして拭えず、未だに「暑苦しい音楽」として、風刺や皮肉の対象として持ち上げられているような気がします。ヘヴィメタルの良さが見直されているというよりは、悪評をいいよ

うに使われて槍玉に挙げられているといった様相です。果たしてヘヴィメタル好きにとっては、このメディアへの露出を喜んでいいものやら悲しんでいいものやら、考えるほどに複雑です。

何故ヘヴィメタルはこのような評価を得てしまうのでしょうか。理由は決して一つではないだろうと思います。音楽性そのものや、それを演奏する人々への感情も要因として挙げられるでしょう。しかしここで取りあげたいのは、ヘヴィメタルを取り巻く人々が作り出す、特有の閉鎖性です。それを最も強く表しているのが、ヘヴィメタルのファン達が着る黒いTシャツなどの衣裳です。各々に好きなバンドのロゴが入った黒いTシャツを着用してライブに臨む姿は、今や因習化したと言ってもいいでしょう。暗黙の了解として受け入れられたのです。無論、例外もありますが、多くのヘヴィメタルファンは、今回のLOUD PARK 06でも見られるように、黒という色を一つの共同体のシンボルとして扱う傾向があります。そのシンボルを通じて、連帯感を得て、全体としての結びつきをより強固なものにするような作用があるのだと思います。こうして一つの共同体として結びつくことにより、内―外という対立構造が生まれる事になります。つまり、黒いシンボルを身につけているもの（内）―それ以外のもの（外）という二項対立です。こうなってしまうと、普段ヘヴィメタルに親しみのない人間は、余計に締め出され、疎外されることを余儀なくされます。むしろ黒いシンボルを身につけることが、共同体内に参加する為の一つのイニシエーション（通過儀礼）となるのです。

このように繋がり合うことで閉じてしまうヘヴィメタルの共同体は、一種、秘密結社に似た隠微な近寄りがたさを醸し出し、結果的にはそれが他者、部外者を受け入れることを拒絶する装置として機能しています。そして、この内気とでもいうべき閉鎖性を、周囲の人間はそれとなく感じとっているのだと思います。それ故に、ヘヴィメタルは未だに一般常識にとって「他者」であり続けるのです。

ヘヴィメタルと黒という記号の親和性。概してヘヴィメタルが黒という色と少なからず関連を持っている中で、最もそれを特化させたのがブラックメタルというジャンルです。一口にヘヴィメタルと言っても、様々なジャンルへと細分化しています。そうした樹形図の一端に、文字通り黒という色と接点が深いブラックメタルがあると思っていただいて差し支えありません。

１９７０年代に生まれたヘヴィメタルが様々な音楽要素と混ざり合い、新しいヘヴィメタルの可能性を追求していくなかで、ブラックメタルは１９９０年代にジャンルとして確立されるに至りました。スラッシュメタルのバンドの一部から派生して、より陰惨な音楽性を求めた結果としてブラックメタルは生まれました。その音楽性は一言で表すには余りに多様性に富んでいます。しかし、概して言えるのは、攻撃的なリズムとギターによって鋭く大きな音を奏でる一方で、キーボードを用いて荘厳で憂鬱な雰囲気を作り出したり、不鮮明で聴き取りにくい音質をあえて選んだりするようなバンドが多いということです。また、演奏者のファッションの特徴として、顔を白く塗ったコープスペイントをする傾向があります。それに、全身黒服、錨（びょう）の打ってあるリストバンドや黒いバンドTシャツ、革ジャケット、ロングブーツなど、いわゆるヘヴィメタルの記号性を顕著に表すような格好している人が多いようです。加えてブラックメタルの世界では、アンダーグラウンドな雰囲気を好む傾向があるらしく、商業主義に妥協したようなバンドはポリシーに欠けている、として批判されることが多く、Cradle Of Filth（※４）などはそうした批判の的となっています。

念のためブラックメタルの代表的なバンドを挙げておきます。Emperor（※５）、Mayhem（※６）、Absurd、Dimmu Borgir、Satyriconなどです。大手のCDショップに行けば、代表的なブラックメタルのCDくらいは購入できると思います。

以上の事をブラックメタルの特徴として挙げましたが、音楽性やファッションの特徴の他にも、もっと重要な側面がブラックメタルの特徴を表しています。それはその思想です。ブラックメタルには悪魔崇拝の思想を謳ったバンドが数多くいるのです。いや、ほぼ全てのブラックメタルバンドが何らかの形でこの悪魔崇拝に関係していると言っても過言ではないでしょう。もともとヘヴィメタルバンドには悪魔崇拝を彷彿させる歌詞やアイコンがよく用いられます。なので、ヘヴィメタルが悪魔崇拝思想を象徴することに対しては今更驚く必要はありません。先述にもありましたが、Slayerというスラッシュメタルのバンドは悪魔崇拝のコンセプトをバンドとして全面的に取り入れ、攻撃的で過激な楽曲を作り出すことにより、人々から多くの支持を得ることに成功しました。しかし勿論、この悪魔崇拝というコンセプトはあくまでも表面的なものであり、実際にSlayerのメンバーが悪魔崇拝を本気で信仰してはいない事実は、本人達の口により語られています。つまり演出の一部として、Slayerは悪魔崇拝を取り入れたのです。一方、同様に悪魔崇拝を掲げているブラックメタルのバンド達には、そのような軽薄さは有りません。本気で心の底から悪魔崇拝を思想として受け入れ、ヘヴィメタルを自分達の思想伝道の手段にでもするかのように、過激な活動を繰り返しています。つまり、Slayerを筆頭とする、演出としての悪魔崇拝を選択したバンドと、ブラックメタルのバンド達は思想の根本において一線を画しているのです。それも自らの能動的な選択によって。

悪魔崇拝という単語そのものは、たとえ耳にしたことがなくても、文字からおおよその察しはつけられると思います。西洋、東洋限らず、邪悪な存在として負のイメージを抱かせる悪魔。人に対して必ずと言っていいほど、良くない影響を与えるものです。常識的に言えば忌避されるべきものを、むしろ逆さまに、つまり肯定的に捉えようとする思想が悪魔崇拝です。ただし、ここで言う悪魔というのは、多くの場合、具体的な存在ではありません。実際に何か形を持つものではありません。どちらかと言えば概念の象徴のような抽象的な意味合いであり、漠然と「主なるものとは逆のもの」という意味を表しているに過ぎません。つまり、偶像として何か形のある悪魔単体を崇めるというよりは、例えばキリスト教とは逆の指向をとる、というような態度そのものを表している場合が多いです。正に対する負の立場を自主的に選んでいるのが悪魔崇拝の特徴と言えるでしょう。

実際のブラックメタルバンドに、アンダーグラウンド的な雰囲気への偏向が見られるのもこれと無縁ではないでしょう。その偏向の結実ともいえるのが、ノルウェーで結成された、Inner Circleというブラックメタルバンドの連合組織です。ノルウェーのブラックメタルバンドのメンバーは勿論、彼らの音楽を好む若者達もこのInner Circleに入団していました。この団体の目的は、ノルウェーからキリスト教を追放する事や、古代の宗教の復活であり、それを達成する為にどれほど邪悪な事をできるかに応じて、組織内の権力が上昇するようにできていました。そうしたシステムが故に、EmperorやBurzum、Mayhemなどのブラックメタルバンドが率先して様々な犯罪を行うようになり、やがてその行為がエスカレートしていきました。

中でも、BurzumのVarg Vikernesがノルウェーの教会を放火したことで、一気に世間を賑わせ、ブラックメタルの存在が明るみに出ることとなったのです。これに続くように教会の放火が、Inner Circleの団員によって行われる中、ブラックメタルは世間の好奇の目を更に集め始めます。しかし一方で、これを先導したVarg VikernesとMayhemのメンバーであるEuronymousとの間で軋轢が生じ、対立が深まりました。両者の亀裂は次第に拡がっていき、最後にはVarg VikernesがEuronymousを刺殺するという凄惨な結末を迎えます。更にはこの事件をきっかけにして、Inner Circleは崩壊し、ブラックメタルシーンの犯してきた様々な罪が暴露されることになりました。放火、自殺、殺人といった犯罪の温床であった事実が決定的になったブラックメタルは、音楽性だけに留まらず、その思想や行動までもが邪悪であるというレッテルを世間一般より貼られることで、尚更その陰惨な雰囲気を色濃くしたのです。

教会の放火に見られるように、ブラックメタルにおける悪魔崇拝が敵対しているのは、キリスト教です。殊(ことさら)に敵対心の激しい北欧のブラックメタルバンドの場合、彼らが抱える衝動のルーツは、自らがヴァイキングの子孫であることの誇りにあるように思われます。キリスト教は当然ながら、ヴァイキングの持っていた様々な信仰を異教と見なし、それらを悪魔的なものとして閉じ込めてしまったのです。ですから閉じ込められ、迫害、排除されたヴァイキングとしての自覚が北欧ブラックメタルバンドの活動を焚きつけていると言っても過言ではありません。こうして、キリスト教と悪魔崇拝が対立する構造は、結局、キリスト教と異教（ヴァイキング）の対立にもなり得ることを意味しています。

このように対立しているのは排除による感情的な憎み合いの関係だけではありません。キリスト教の倫理、道徳、哲学の側面からも対立するものとしてブラックメタルの反キリスト教活動はあります。彼らはここでキリスト教に抗し得る思想背景として、フリードリヒ・ヴィルヘルム・ニーチェの思想を援用しています。

キリスト教は弱者の為の道徳であると言われることがあります。これに真っ向から異を唱えたのが二十世紀のドイツ哲学者ニーチェでした。キリスト教における徳の高さは、禁欲的な態度の度合いによって決定されます。貧しいものは幸いである、というキリストの言葉はそれを顕著に表していると言えます。徳の高い賢人ほどその身なりを貧相に見せようとする傾向があり、自然発生する欲望を如何に克服するかという事に重点が置かれています。それは貧しくあらざるを得ない社会的弱者達の不満（ルサンチマン）を紛らわせるための手段と言い換えることもできます。貧窮した状況を逆説的に「尊し」とすることで、大胆な価値観の転倒を図ったのです。それがキリスト教における弱者のための道徳の根幹なのです。

これをニーチェは痛烈に批判します。貧なることは決して尊いことではなく、あくまでも貧なることであり、むしろそうした人々は強者とならなければならないと説くのです。あたかも先ほどの大胆な転倒がまやかしに過ぎないと言うように。つまり、弱者は弱者であり、強者は強者であると認める事が彼の思想の前提となっているのです。更にそれを踏まえた上で、そのような強弱の構造において、組織を先導すべきは強者であると、ニーチェは言います。彼の言う所の強者というのは、「上に立って然るべき優れた人間」という意味なのですが、こうした強者による弱者の一方的な支配を肯定しているのは紛れもない事実なのです。これはまさしくキリスト教に見られるような、弱者を主眼に置いた道徳観とは対立します。そして同時に、強者の台頭を容認する態度が、北欧ブラックメタルの連合組織たるInner Circleの上下関係を形成するルールと照応しているのです。

キリスト教に対する反発としてニーチェの思想すら援用したブラックメタルではありますが、それ故に彼らがある矛盾を内包する事になってしまったのも事実です。その矛盾というのは、ニーチェの思想が要請する強者の権力と、ブラックメタルという音楽が背負ってきたマイノリティーへの固執との間に生じています。そもそもニーチェの思想を援用する彼らの言い分はこうです。強者が弱者から搾取することは当然であり、弱者は排斥されるべきものである。彼らはニーチェの説いた強者の優位性を頑(かたく)なに主張し、それを理由にして弱者を退けようとしているのです。ここでは、強者はまさしく主張を行っているブラックメタルのバンド達そのものであり、弱者というのは、彼らの起こす犯罪行為の対象や、キリスト教を信仰する人々の事を指します。しかし考えてみれば、ブラックメタルというジャンル自体は、アンダーグラウンドであること、つまり多数派を嫌い、主流であるよりも支流であることを誇りにしている傾向があります。主流になりきれず、少数派であることに対して開き直った結果、ブラックメタルはアンダーグラウンドであることを自ら選んだのです。果たしてこの立場を強者と呼んでいいものなのか、疑問が残ります。そもそもメタルという音楽自体、発生の起源は、主流であったロックのムーブメントからすれば異端であり、その段階からマイノリティーの音楽という印象は否めないものでした。商業的に広範化してからも、一部のファンの熱狂的な支持を得はしますが、やはり世界を席巻するような多数派の音楽に成り上がることもできず、次々と生まれてくる音楽の潮流に追い越されていったのです。そこには、弱者を支配できるような強者であることを保証する要因が欠けているようにすら思えます。むしろ彼らは多数派から異端扱いをされた少数派であり、迫害を受けた弱者であると言うことができます。つまるところ、ブラックメタルは立場としては弱者でありながら、その主張はあたかも自分達が強者であるかのようになされ、その立場と主張の間には確実に矛盾が存在しているのです。

また、一方のキリスト教にもこの矛盾は見られます。先述のように、キリスト教が弱者の為の道徳であることは既に明白です。しかしながら、この道徳を説こうとしたのは、教会です。歴史上、教会という組織が如何に支配的な地位を獲得していたかは、西洋史を遡(さかのぼ)れば歴然とした証拠が残っています。宗教組織と政体が結託して、様々な支配構造を生み出し、結果的に下級層の弱者達を苦しめていたのは事実です。だとすれば、支配階級にある教会が、弱者の為に道徳を説きながら、その実、弱者達を苦しめていたという構造にも、やはり矛盾があるのです。

こうして両者の間に矛盾が生まれていることから解るように、決してどちらが絶対的に正義であり悪であるかを決めることはできません。いわんや、多数派か少数派かといった、数量から優劣を決めるものでもありません。どちらも同じように悲惨な歴史を持っているという点で、両者は対等なのです。更には、そのような過去を背負っていながらも、未だにブラックメタルは健在であり、多くのメタルファンを魅了していることも確かなのです。悲惨な事件に直面しあわやブラックメタルも消滅かと思えば、彼らはそれでも自分達の音楽を磨き上げることに努め、ブラックメタル消滅の危機を回避しました。そこに音楽の力を感じずにはいられません。どんな過去を持とうとも、音楽に対して真摯に向き合う演奏者がいて、それを正直に受け取る聴衆がいます。両者の関係の前では、残酷

な事件ですら霞んでしまうような圧倒的な魅力があるように思えるのです。細かいことはいいから、今聴こえてくる音楽を楽しもうじゃないか。そんな前向きなメッセージがどんな音楽にもあって、それはきっとヘヴィメタルであろうと同じだと思います。確かに一癖も二癖もあるヘヴィメタルではありますが、それを楽しむ人々の表情はどんな音楽でも変わりません。ヘヴィメタルであろうと一つの音楽であり、それを心の底から楽しむ人達がいるのは事実です。だからこそ、今一度、塗り固められた先入観を取り払った上で、真正面からヘヴィメタルと向き合うのも良いのではないかと思います。

※1　スラッシュメタル

１９８０年代半ばから１９９０年代前半までメタル界を風靡した音楽ジャンル。従来のヘヴィメタルに更なる過激さを加えた結果として発生した。

※2　Megadeth

１９８２年にアメリカで結成されたスラッシュメタルバンド。複雑な曲構成や政治的題材を扱った歌詞からインテレクチュアル・スラッシュと呼ばれる。

※3　Slayer

１９８２年にアメリカで結成されたスラッシュメタルバンド。Metallica、Megadeth、Anthraxと共にスラッシュメタル四天王と称され、その中で最も暴虐性や悪魔崇拝的要素が強いとされている。

※4　Cradle Of Filth

１９９１年にイギリスで結成されたブラックメタルバンド。悪魔的思想や伝説をコンセプトとして、メロディアスで荘厳な楽曲を演奏するが、近年徐々に正統派メタルへの傾向が見られ、ブラックメタルファンからの批判も多い。

※5　Emperor

１９９１年にノルウェーで結成されたブラックメタルバンド。複雑なギターアレンジとキーボードの音使いは後のブラックメタルバンドに大きな影響を与えた。

※6　Mayhem

１９８３年にノルウェーで結成されたブラックメタルバンド。スラッシュメタルの影響を受けつつも、その攻撃性と暗鬱さを更に特化させたスタンスで、ブラックメタルの方向性を決定づけた。

【参考資料】

・Wikipedia
http://ja.wikipedia.org
・はてなダイアリー
http://d.hatena.ne.jp
・黒金属大事典
http://www.bm-addict.com/encyclopedia/encyclotop.html